

## ■ 学位論文要旨 (修士)

# 女性のケガレと地域社会

## — 祭礼行事への女性の参加をめぐる —

小 國 真 理\*

本論文は、播磨地方の秋祭りへの女性参加の排除の現状を分析し、地域社会における祭礼行事への参加が地域へのアイデンティティ形成に果たす役割を明らかにすることによって、祭礼行事への男女共同参画の実現が人口減少が進む地域社会の存続に寄与することを明らかにすることを目指すものである。

地域社会で伝統的に続く祭りには、参加する住民の存在は不可欠である。昨今は転入してきた新住民が参加できるようになった地域が増加しているが、伝統的に女性の参加は認められず、今なお多くの地域で祭祀行事への参加から女性は排除されている。私自身、兵庫県福崎町二ノ宮神社秋祭りに集う太鼓台屋台に乗りたいと切望しても「女性」ゆえに叶わなかった。どの祭りでも、女性が参加できない理由として「女性はケガレている」からだと言明されることが多い。なぜ女性は「ケガレ」ているとされ、祭りに参加できないのか。本論文ではケガレの構造を明らかにし、各地で「女神輿」などが新設されている実態を分析して、女性が祭りに参加する契機と今後の参加拡大の可能性を検討する。

なお本稿が対象とする祭りは、地域社会の氏子祭祀の一部に組み込まれた祭りに限定している。伊勢神宮や出雲大社のように、地域社会を超えて氏子組織が拡大する神社の祭りは考察の対象から外した。また、行政や市民、あるいは企業なども参加して新しく創造され、宗教色をもたない都市型のフェスタもここでは取り上げないことをお断りしておく。

I 章では、少子高齢化や人口減少により地

---

\* 京都女子大学大学院 現代社会研究科  
公共圏創成専攻

域社会の伝統的な祭りが継承されるには女性の参加が必要であることを述べた。

続くⅡ章では、「祭り」の実態や機能を考察した。祭りには神の存在が不可欠であり、地域社会で行われる祭りには氏神がそれにあたる。氏神は集落を統合する機能を持っている。氏神を祀る全ての住民を「氏子」と呼ぶが、祭祀集団が形成されるときに女性は除外される。祭りへの参加は単なるイベントの担い手となるだけでなく、地域社会へのアイデンティティ形成を促すと考えられる。氏神を中心に、氏子が祭りをを行うことで氏子に結束が生まれ、祭りが毎年行われることで、結束は再強化される。祭りのもつ統合の機能が男性だけに担われていることによって、女性は地域社会へのアイデンティティ形成のチャンスから排除され、その結果女性人口の流出に至ることを示した。

Ⅲ章では女性の「ケガレ」概念の歴史的変遷と地域社会に根付く「ケガレ」観を考察した。祭祀の場から女性を遠ざけるために産穢を強調することによって、元来は双系的であった日本の家族を家父長制へと移行させる政治的意図があったと考えられている。昨今は女性の出産や月経は忌むべき対象とされなくなっているにもかかわらず、「ケガレ」の意識だけが残存している結果、「伝統」の名の下で様々な場面で女性の排除が続いていることを明らかにした。

Ⅳ章では、祭礼行事への女性の参加形態によって5つの類型を設定し、性別に関わらず参加できる「男女共同参加型」以外の4つの

類型に当てはまる各事例を報告した。女性の参加が全くない「伝統的な女性排除型」に灘のけんか祭りを代表とする播磨地域の秋祭りと、兵庫県福崎町二之宮神社秋祭りに参加する福田区を報告した。伝統的に女性の役割が男性と別途設けられている「伝統的役割分担型」として兵庫県多可町糶屋稲荷秋祭り、少子化によって女性の参加が認められるようになった「少子化型」として福崎町二之宮神社秋祭りに参加する高橋区の女の子の乗り子の事例を、女性が特別枠で祭りに参加する「一部参加型」として岡山県真庭市久世祭の女だんじりと石川県山中温泉こいこい祭りの女神輿を報告した。女性に参加の道が開かれている祭りの特徴として、商業地域であることが挙げられ、純農村地域より新しい取り組みを取り入れることが農村より積極的に行われることが影響しているのではないかと考える。また両者の関係性は明らかではないが、兵庫県福崎町は男女共同参画に関する取り組みが兵庫県内でも遅れている自治体の一つであることにも附言した。

Ⅴ章では「伝統的な女性排除型」の事例である福崎町福田区において、女性参加に対して男女それぞれがどのような意識を持っているのか祭礼行事に関与した住民を対象に調査を行い、分析した。男性と同じレベルでの参加は男女ともに難しいと考えており、特に男性の反対が圧倒的に多いという結果を得た。法被の着用など簡易な参加方法では賛成意見が多くなっており、これが秋祭りの輪の中に女性が入るきっかけになると考えられる。ま

た、全国的に女性の消防団員が増加しているが、だんじりの担ぎ手である消防団員の男性には「(女性の消防団員は) 必要ない」という回答が多く、一方女性回答者は「将来必要になるかもしれない」、「入りたい人がいれば良い」と人口減少が進みつつある地域社会を現実的に考えていることが伺える回答であった。

Ⅵ章では総括として、性別に関りなく男女が共に参画する祭りの実現のためには、女性を参加させようという圧力と、女性自身が参加の意向を自ら示す圧力の両方向の力が必要であるとし、男性側の協力はもちろんのこと、女性自身が遠慮やためらい無しに参加することが不可欠であるとの見解を示した。女性にとって「生きにくい」社会は、男性にとっても「生きにくい」社会である。祭りへの男女共同参画を実現することによって、すべての住民が地域社会に根付き、人口減少や少子高齢化の問題解決の糸口になるのではないだろうか。